

# 「漢字樹」を用いた新しい漢字指導の試み

－日中漢字文化の特質に着目して－

李 軍

キーワード：「漢字樹」、伝統的言語文化、日中漢字文化、形声文字、同訓異字、同義反復熟語、高等学校、漢字、語彙単元学習

**【要 旨】**日本の漢字教育は、戦前の「読み書き同時指導」の方針から戦後の「読み先行、漸次書く」という方針へと移行した。しかし、漢字の読み書きを重視した旧来のドリル的な指導方法を踏襲する状態が長らく続いている。2008年および2009年に告示された学習指導要領では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。漢字指導においても、中国の漢字文化を柔軟に受け入れて独特の言語文化を形成してきた日本語（国語）の特質に踏み込んだ指導が求められていると思われる。

そこで、本研究では、一文字の形・音・義を反復して記憶させたり、象形文字の絵図を用いてその成り立ちを説明したりするような従来の指導法とは異なり、一文字の形・音・義を漢字学習の出発点として、それに関連する多くの漢字、語彙を用いながら、広い視野で日中漢字文化の融合と広がりを持示し、日本語の特質に対する理解を深めさせる漢字指導法を提案する。この指導法では、和語と漢字の融合や発展を表現する「漢字樹」を用いる。「漢字樹」とは、中国で生まれた漢字を根元の太い幹とし、中国における漢字の増殖過程と日本における漢字の受容と発展をいくつも伸ばしていく枝に描き、この樹形の背後に潜んでいる中国と日本の漢字文化の奥深い繋がりを学習者に認識させるモデル図である。「漢字樹」を用いる指導法では、国語辞典や漢和辞典を活用させ、漢字の形・音・義に含まれる興味深い要素を自ら発見させ、これからの漢字、語彙学習のきっかけを与えることを狙いとしている。本指導法は高校生を対象とする。その理由は、高等学校では古典や漢文を重点的に扱っているにもかかわらず、漢字への興味・関心を喚起するような指導が十分に行われていないという現状があるからである。

## はじめに

日本では、小中高校を問わず、長年来ドリル的な反復練習や漢字テストのような漢字指導が主流となってきた。漢字の意味や面白さを理解せずにひたすら漢字を繰り返し書かされたり、ちょっとした書き間違いで減点されたりすることで、漢字学習が嫌いになった学習者も少なくない。また、小学校から高等学校までの国語教科書を概観してみると、小学校段階では象形文字を絵図にしたり、漢字の成り立ちを物語風に提示したりすることで、学習者に漢字への興味・関心を抱かせるような工夫が見られるが、中学校や高等学校に入ると、国語辞典や漢和辞典の使い方、調べ方の指導や、二文字や四文字熟語の基本的な構造の説明が多くなり、学習者の興味・関心を喚起する工夫は乏しくなっている。

パソコンや携帯電話などの情報機器が普及し、手書きが次第に少なくなっている今日、如何に漢字への興味・関心を喚起し、これからの漢字学習に意欲を持たせるかが重要な課題となっている

る。2008年および2009年に告示された学習指導要領では、国語科に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、伝統的な言語文化を重視する方針が明確に打ち出されている。日本の伝統的な言語文化と国語の特質は両方とも漢字、漢字語彙を抜きにしては語れないものであるだけに、これを契機に、漢字、漢字語彙指導に一層の工夫が加えられるべきであろう。

高等学校では古典や漢文を重点的に扱っているにもかかわらず、漢字への興味・関心を喚起するような指導が十分に行われていないという現状を踏まえて、本稿では、高等学校で活用できるような漢字単元学習の指導法を提示する。具体的には、中国と日本における漢字の成立・発展・伝播・受容・変容などを示す「漢字樹」を用いることで、日中の漢字文化の深い関わりと特質を理解させ、これからの漢字、語彙学習の動機を与え、学習意欲を育成しようとするものである。

## 1. 「伝統的な言語文化」と「漢字文化」の関連性

まず、国語科学習指導要領で「伝統的な言語文化」がどのように扱われているかを見てみよう。『高等学校学習指導要領解説・国語編』（東洋館出版 2009）では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」について次のように記されている。

### ア. 伝統的な言語文化に関する事項

#### (ア) 伝統的な言語文化への興味・関心を広げることについての事項

(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気づき、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。(中略)

「我が国の文化と外国の文化との関係」を取り上げているのは、我が国の文化を理解するに当たって、中国など外国の文化との関係が重要となるからである。我が国は中国の文化の受容とその変容とを繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ、古文や漢文の両方を学ぶことを通して、両文化の関係に気付くことが大切である。古来、我が国は、文字、書物を媒介にして、多くのものを中国から学んだ。その結果、漢語や漢文訓読の文体が、現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている。

### イ. 言葉の特徴やきまりに関する事項

#### (ア) 言葉の成り立ち、表現の特色、言語の役割などについての事項

(ア) 国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること。

「国語における言葉の成り立ち」には、二つの側面がある。一つは言葉の歴史的な成り立ちと変遷であり、もう一つは言葉の構造としての成り立ちである。

前者は、国語における言葉はどのようにして成立し変遷したかということである。(中略)

後者は、語句、語彙の構造的な仕組みという意味での成り立ちである。

語句の構造については、例えば、二字から四字の漢語を取り上げて、その要素の間の修飾、被修飾の関係を考えることを通して理解することができる。

(下線は引用者)

この解説によれば、日本の文化と中国の文化との関係を学習者に理解させることは、現代の日本語に対する理解を深めさせるために重要な意義を持つとされている。日中間の文化接触においては、漢字文化の受容、変容、定着などがその基盤を成している。漢字、漢字語彙の重要性は現代に限られたものではない。古代において『万葉集』や『源氏物語』に代表される華やかな古典文学作品が生まれるうえでも、近世において先進欧米文化を日本に導入するうえでも、漢字に由来する漢字かな交じりの文字体系は計り知れない役割を果たしてきた。長い歴史の流れの中で、日中の漢字、漢字語彙がどのように生まれて、どのように変遷してきたのか、その成り立ちや形成過程を日中両言語の奥深い繋がりのもとで捉えるとき、「伝統的な言語文化」の問題とも向き合うことができる。上記の解説における伝統的な言語文化と漢字、漢字語彙との関連性を図式化すると、図1のようになる。

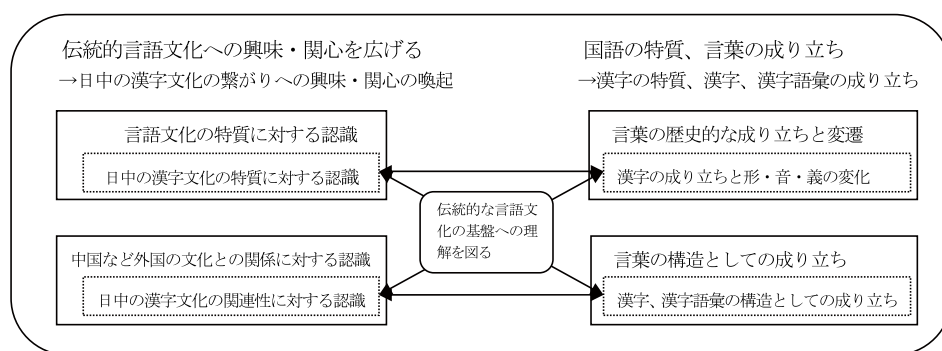


図1 「伝統的な言語文化と国語の特質」と漢字、漢字語彙の関連性

図1では、日中の漢字文化の関連性を日本と諸外国の文化融合の一環として捉えている。一方、時代とともに変化し続ける漢字の特質や日中の漢字、漢字語彙の構造としての成り立ちを国語の特質の一つとして位置づけている。これらの要素を関連させて指導することで、日本の漢字、漢字語彙が中国古来の漢字文化の面影と日本の言語文化の特質を内包していることを認識させ、伝統的な言語文化の基盤に対する理解を深めさせることが期待できよう。

## 2. 「漢字文化」の捉え方

「漢字文化」という概念は多様な側面を併せ持っているため、その捉え方も様々である。「漢字文化」ということばは、「漢字という文字体系の文化」なのか、「漢字の字形から推測できる古い時代の文化」なのか、あるいは「漢字という媒体によって記録または継承されてきた文化」なのか、「漢字」と「文化」の間に何が省略されているかによって、解釈が変わってくる。

藤堂明保は1982年に著した『漢字文化の世界』（角川書店）の中で、中国の伝説や少数民族の源流を『周易』『史記』などの文献や出土した文物から復元し、数え方や測り方の由来、器物、農業、工芸、織物、製紙、印刷などについて、漢字の成り立ちを通して説明している。例えば、「旬」「臼」「曾（「甌」の原字）」などの文字の字形や字義を通して、古代中国の器の形を推測したり、「衆」「辰」「農」「襄」「耕」などの文字の成り立ちを通して、当時の農業の様子を説明し

ている。これは漢字の字形や字義に基づいて古代中国の文化を紐解く典型である。

高田時雄は2009年に編集した『漢字文化三千年』（臨川書店）の「前言」で、次のように述べている。

漢字はわれわれ日本人にとって当初は外來の文字であった。しかし一旦漢字を受け入れ、その使用を始めてからは、様々な試行錯誤を経て、巧みに自らの國語に適應させてきた。假名の發明により國語の表記が一層容易になり、機能的に大きく前進したことは事實であるが、今日でも漢字なくしては國語の表記に多大の困難が伴う。日本人の言語生活から漢字を捨ててしまうことは不可能に近い。更に日本人は古くより漢字を通じて思想の形成、制度の確立、技藝の錬磨、詞藻の洗練などを行ってきた経緯があり、漢字文化を多大な恩恵に浴してきた。しかし一方では長期に渡り漢字文化の一翼を擔い、その内容の充實に貢獻してきた側面も否定しがたい。この文字を用いてきた歴史の重みを現時点でもう一度考え直してみたいと思う。  
(字体は原文のまま)

『漢字文化三千年』は、漢字で記録された文献を通して、日本の立場から漢字文化の浸透とその影響を見つめようとする類型である。

このように、漢字や漢字で書かれた文献を通じて、古代中国の文化を理解したり、日本文化の生成を再現したりするという「漢字文化」の一つの捉え方が存在する。

一方、「漢字文化」を、漢字を媒介とする政治、社会、制度、慣習などの文化複合として捉える見方もある。すなわち、漢字の試験同然の科挙に合格した役人が中核となって維持された中国的な中央集権制度や、漢字で克明に記録された「家譜」「族譜」を重視する中国的な家父長制度、漢字で書き遺された書籍を根柢とする儒教をはじめとする諸宗教などの文化複合が「漢字文化」と称されることも多い。

また、漢字によって担われている固形の文化遺産だけでなく、漢字を誕生させた漢民族の特質や生活環境、漢民族の勢力の拡大に伴った周辺民族の移動と同化、周辺民族の侵入による漢民族文化の変容、さらに周辺の諸地域にもたらされた文化の浸透（いわゆる漢字文化圏の形成）などといったように、東アジアにおける諸民族のダイナミックな変動の歴史の中で「漢字文化」を捉えることも可能であろう。

ここでは、漢民族の特質や生活環境、民族移動、民族同化、多民族の共存による話し言葉（方言）と書き言葉（漢字）の乖離など、漢民族と周辺民族の文化的融合過程の中で生み出された多彩な側面を持つ「漢字文化」に焦点を当てることで、中国語や日本語における漢字使用や漢字語彙の形成過程を考え直してみたい。

まず、橋本萬太郎編著の『民族の世界史5 漢民族と中国社会』に基づき、漢民族文化の特質を辿ってみる。

春秋・戦国時代では鉄器の出現によって、都市化を含む社会の組織構造が大きな変革を見せていた。「新しい軍事・生産技術をいち早くマスターした有力な諸侯は、もはや『封建』や『都市国家』の枠にとらわれず、すすんで辺地を開いて資源を入手し、植民をすすめる、商工業、農業、

鉞業をおこし、富国強民によって周辺をおさえ<sup>2)</sup>」るようになった。そして、初期の「国家都市」は宗族の拡大や資源の獲得のため、その周辺地域の少数民族に同化を求めつつ、その文化を浸透させていった。この民族同化に関して、橋本萬太郎・鈴木秀夫（以下、橋本ら）は次のように述べている。

漢民族の言語とその文化圏が、中原地方を中心とした、何千年にもわたる、周辺民族のいかにゆるやかな同化をはかりつつ成立したものであるかということが、うかがえるであろう。漢民族が、東に夷、西に戎、南に蠻、北に狄という「未開人」を配し、中心に開花した中華の民をすえるという、伝統的な世界像をつくりあげたのも、ゆえなしとしない。（中略）

いわゆる華夷の思想はこうして生まれた。何がその華（漢民族）と夷（周辺の未開人）をわけているかといったら、要するに漢字を受け入れ、その背景にあるいわゆる「中国風」の生活をしているかどうか、「中国風」の農耕経済をいとなんでいるかどうかである。

西北方から中原地方に入ってきた周の人口など、今日からみれば、たかがしれた数であったろう。だから極端に言えば、漢民族とは、そのかなりの数が、このように同化された諸民族であるといつてよい<sup>3)</sup>。

（傍点は原文のまま）

ここで指摘されているように、常に民族同化が行われていたため、漢民族は中原地方を占拠した民族と同化されていった周辺民族の総合体といったほうが相応しいかもしれない。

橋本らは漢民族の周辺に生存する少数民族を「第一次外輪圏」、その外をかこむ圏域を「第二次外輪圏」と名付け、「第一次外輪圏」は民族同化によって、歴史の舞台から姿を消したものが多かったのに対し、「第二次外輪圏」に当たる朝鮮や日本、ベトナムなどの諸国は、「漢民族的なまとまりをマイクロコズムにした近代国家をつくるのに成功した<sup>4)</sup>」と述べている。さらに「これらの国々においては、つい近代にいたるまで、漢民族の言語が公用の書きことばであった事実が、今では、ややもすれば忘れられがちなもの、そのためである<sup>5)</sup>」とも指摘している。

上記の「第二次外輪圏」という橋本らの捉え方は、中国の漢字文化を受け入れながら独自の言語体系を作り上げた日本の漢字文化を理解する際に重要なヒントとなる。すなわち、日本が「第二次外輪圏」であったがゆえに、古来の大和言葉の姿を残したまま、平仮名、カタカナや漢字の音読み、訓読みなどを発明して、古代中国の漢字文化を柔軟に受け入れることができたのである。橋本らは、漢民族文化の影響を受けた「第一次外輪圏」「第二次外輪圏」を含めて「漢字文化圏」と称しているが、この「漢字文化圏」という用語が定着した背景には、「漢字文化」を単なる漢字という文字体系と見るのではなく、漢字に関連する政治、社会、制度、慣習などの文化複合と捉える見方が広く受け入れられたことがある。

しかし、国語教育界においては、漢字という文字体系の創造過程における人々の思考と文字の形態の相互関係に対して「漢字文化」という用語を用いることが多く、とりわけ、象形文字や形声文字としての漢字の創造過程に注目が集まる傾向がある。例えば、向山洋一が提唱している「漢字文化の授業」は「漢字の学習の中に『読み・書き』だけではなく、成り立ち、意味、哲学を積極的に加えようとした主張である<sup>6)</sup>」と定義づけられ、漢字の成り立ちや意味に焦点を当て

て指導することが特徴である。

本研究において用いる「漢字文化」は、漢字という文字体系に関連する政治、社会、制度、慣習などの文化複合全般に視野を広げているわけではなく、国語教育界において一般化している狭義の「漢字文化」である。ただし、象形文字としての漢字の創造過程にだけ注目するのではなく、その後、形声文字、会意文字が生まれて文字数が増え、さらに周辺諸民族がそれぞれの言語体系の中に柔軟に漢字、漢字語彙を導入していった過程とその結果を特に重視している。したがって、漢字そのものに焦点を当てているという点では狭義の「漢字文化」に近いが、日本と中国の漢字文化の融合・変遷過程全般を、まさに広義の「漢字文化」で見たいとするものである。

では、このような多彩な「漢字文化」をどのように漢字、語彙指導に取り入れるべきか、次節では、中国と日本における漢字、漢字語彙の成立・発展・伝播・受容・変容を反映する「漢字樹」を用いて展開してみたい。

### 3. 日中の漢字、漢字語彙の特質を認識させる「漢字樹」

漢字の形・音・義は漢字の三要素と言われている。図2で示したように、一文字の形・音・義を通して、中国における漢字の広がりとは日本における漢字の受容過程を再現することもできる。

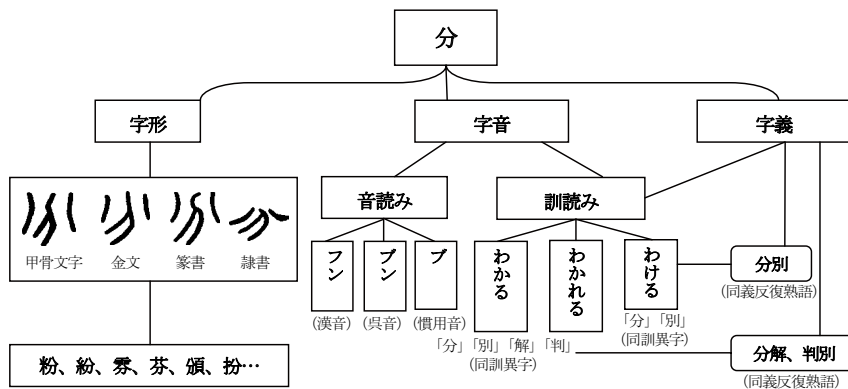


図2 「分」の要素図

中国で生まれた「分」という文字の字形は「刀で物を二つに切り分ける」さまを表し、この字形で「わかる」という意味を表している。中国では「わかる」という意味をさらに具体的に表現するために、「分」に偏や旁をつけて形声文字を作っていた。一方、漢字が日本に伝わってきたとき、日本人は漢字音を大和言葉の音韻体系に近い音で示す音読みを作り、漢字の意味に相当する大和言葉を当てて訓読みを編み出した。日本における語彙拡充過程では、例えば「わかる」「わかれる」に「分」「別」といった「同訓異字<sup>7)</sup>」を当てることによって意味細分化を可能にした。さらに、日中両言語に多く存在する「分別」「河川」「身体」のような同訓異字を組み合わせた「同義反復熟語<sup>8)</sup>」について、その形成理由を推測することで、漢字語彙の形成過程に生じた漢字文化の奥深さへの理解を深めることができる。

図2に示した要素図は、中国で生まれた漢字を根元の太い幹とし、中国における漢字の増殖過程と日本における漢字の受容と発展をいくつも伸ばしていく枝に見立てた「漢字樹」(図3)として表現することもできる。「漢字樹」という形で示すことで、この樹形の背後に潜んでいる中国と日本の漢字文化の奥深い繋がりを学習者に認識させるだけでなく、その発展過程のイメージをより分かりやすく伝えることもできるであろう。

図3に示したように、漢字樹は主に字形、字音、字義の三つの部分からなっている。字形の部分では、甲骨文字や篆書体など中国における字体の変容を示すことで、漢字の成り立ちを理解させる。字音の部分では、音読みは漢字音を示し、それを音符とする形声文字群を集めさせる。また、同じ訓読みに当てられた同訓異字を調べさせ、それぞれの漢字の共通点と相違点を考えさせる。字義の部分では、同訓異字からなる同義反復熟語を扱い、同じまたは類似した意味を持つ二つの漢字の組み合わせによってできた同義反復熟語の形成理由を考えさせる。

漢字樹の中で、中国における漢字の増殖過程と日本における漢字の受容過程がどのように反映されているのか、図3の樹形の左下から時計回り順に説明すると、次のようになる。

まず、左下の甲骨文字の字形から「分」の成り立ちや漢字の表意性を理解させることができる。

次に、「分」の音読みには「フン(漢音)」「ブン(呉音)」「ブ(慣用音)」の三種類がある。樹形の上部は「分」を音符とする形声文字群「粉」「紛」「雰」「芬」「頒」などである。これらの形声文字には「分」という音符が共通するだけでなく、

- ・「粉」: 米を細かく分ける、小さくくだいてこなにする<sup>9)</sup>。
- ・「紛」: 糸へんは小さいものを表し、「紛」は小さいものが分散して乱れることを表す。
- ・「雰」: きり、もやもやと分散する水蒸気。小さくわかれる、分散する。
- ・「芬」: 草の香りがひろく、わかれ散る。
- ・「頒」: くっついているものをわける。広くわけ散らす。おおぜいにわけ与える。

のように、これらの漢字の中に「わける」「わかれる」という「分」の語源的な意味合いも共通している。つまり、「分」はこれらの形声文字の音符だけでなく、語根でもある。

樹形右上は「分」の訓読み「わける」「わかれる」「わかる」である。「わける」「わかれる」に当てられる同訓異字は「分」「別」、 「わかる」に当てられる同訓異字は「分」「判」「解」で

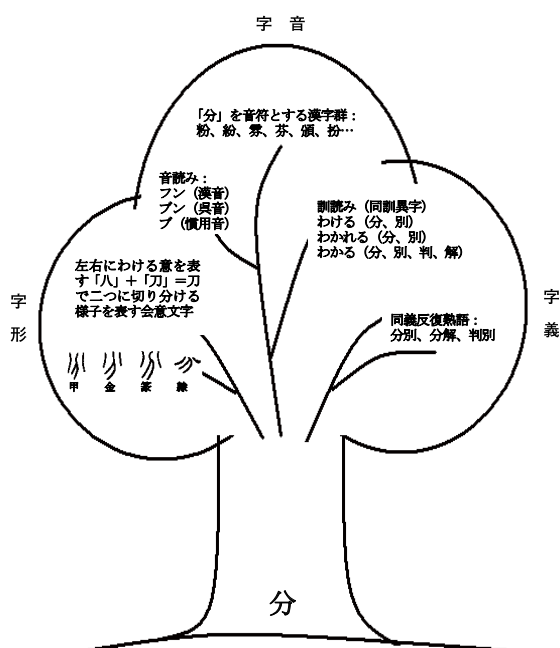


図3 「分」の漢字樹

ある。「分かれる」「別れる」といったように異なる漢字が当てられたため、異なることばとして認識されている。しかし、「わかる」「わかれる」「わかる」という和語のイメージを絵図化すると、それぞれの漢字の中に和語が持つ根源的な意味合いが共通していることが分かる。

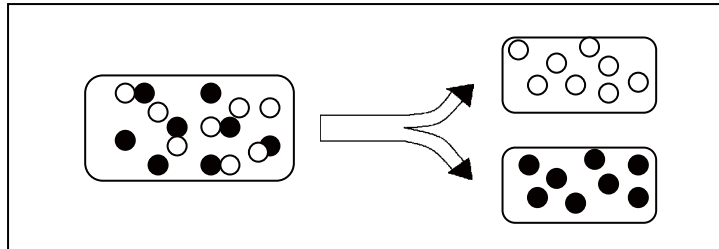


図4 「わかる」「わかれる」「わかる」の共通根源イメージ図

図4では、ある物体の中で二種類以上のものが混ざっており、それを別々にする作業を表すのが「わかる」、人力ではなく、自然に別々になる様子を示すのが「わかれる」、というイメージを表現している。そして、まじりあって混沌としていたものが整理されてはっきりするのが「わかる」ということである。

「わかる」「わかれる」「わかる」に当てられた同訓異字「分」「別」「判」「解」を組み合わせると、「分別」「分解」「判別」のような「同義反復熟語」を作ることができる。同義反復熟語の形成理由については、次節で詳しく述べることにする。

このように、「分」の漢字樹を通して、中国語（漢字）の増殖過程と日本語の語彙拡充や意味細分化過程、さらに漢字語彙の構成上の特質を見出すことができる。それでは、学校における実際の漢字指導において、具体的にどのように進めていくことができるのか。次節では、別の例として「生」の漢字樹を用いて、漢字、語彙指導を展開していく単元学習の指導案を示す。

#### 4. 「生」の漢字樹を用いた漢字、語彙指導

❖ 単元名：生き生きとした「漢字樹」を作ろう！

❖ 授業対象・授業科目：高校1年生・国語総合

❖ 授業目標：

- ① 「生」の漢字樹（図5）を通して、漢字の成り立ちや増殖の仕組み、漢字と和語との融合・変遷過程に見られるそれぞれの言語の特質を認識させる。
- ② 今まで無意識に使っていることばに目を向けさせ、漢字、漢字語彙に興味・関心を喚起し、以後の漢字学習においても自発的に進めていく意欲を養う。
- ③ ことばのイメージを絵図に描きながら表現させることで、豊かな想像力、表現力を育成する。



## ❖ 配当時間：5時間

## 第1時：導入部分

## 【学習内容】

- ① 漢字とほかの表音文字を比較させて、漢字の表意性を認識させる。
- ② 「生」の字形、字音、字義を通して、漢字の広がりに対する理解を促す。

## 【学習活動】

- ① 図5の「生」の甲骨文字を観察し、具体的な形象から抽象的な意味合いを想像して、気づいたことを話し合う。
- ② 「生」の読み、「生」が含まれる漢字、「生」と意味の類似したほかの漢字、「生」および意味の類似した漢字が使われている熟語を集めさせ、グループ作業で「生」の漢字樹を作る。

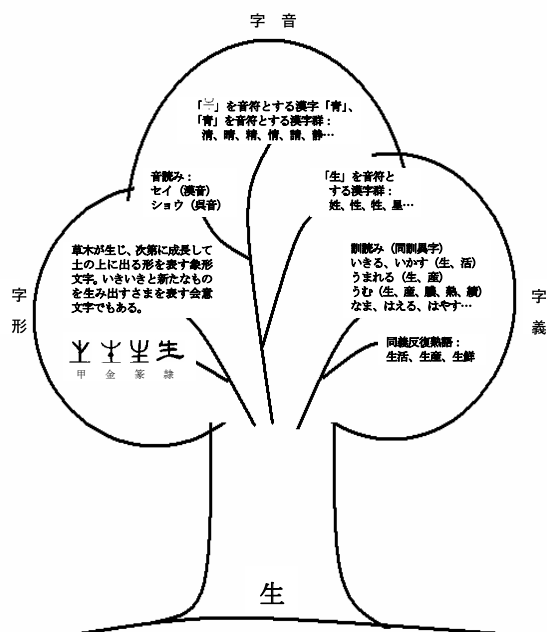


図5 「生」の漢字樹

## 【指導上の留意点】

- ・本時では図5の字形の部分だけを提示する。残りの部分は各グループに作成させる。
- ・人によって思いつくものが異なるので、それぞれの個性を尊重する。

## 【評価】

- ・話し合いや発表の内容を通して、漢字の広がりに対する認識ができたか。

## 【考察】

「生」の甲骨文字は草木が生じ、次第に成長して土の上に出る形をした象形文字である。芽が生えてくるといことは、新たなものを生み出し、生きている証であるため、「うむ」「うまれる」「いきる」といったような派生的な意味を持つようになり、会意文字となる。一つの単純な符号から様々な漢字、その組み合わせによってできた熟語へと広がっていくのが漢字の特徴である。

## 第2時：形声文字

## 【学習内容】

- ① 形声文字を通して、漢字の造語力、漢字語彙の拡充過程を認識させる。
- ② 形声文字の音符の意義を再確認させ、会意兼形声文字の概念を理解させる。

## 【学習活動】

- ① 図5の「生」の篆書体「𠂔」を観察し、それに関連する漢字を想像する。
- ② 「青」からできた形声文字群の意味や「生」からできた形声文字群の意味を調べる。
- ③ 形声文字の音符はどんな役割を果たしているかを考え、会意兼形声文字の概念を理解する。

## 【指導上の留意点】

- ・今日の字形では、「生」と「青」の上の部分が異なるので、指導の際に注意を払う必要がある。
- ・形声文字と会意兼形声文字の区別や識別方法を分かりやすく説明する。

## 【評価】

- ・形声文字の構成上の特徴や音符の役割、会意兼形声文字の概念を理解したか。

## 【考察】

図5で示したように、「生」の甲骨文字が金文になるとき、下の葉っぱが「・」となり、篆書になると、その「・」が「一」に変わっていった。篆書の「𦰇」は「青」の上の部分であり、「青（セイ）」の音符でもある。それだけでなく、「生」は「若葉のようにすみきった」様子を示しており、「青」の語根的な意味合いも表している。さらに、「青」からできた形声文字「清」「晴」「精」「情」「請」「静」は「青（すみきったさま）」に部首や旁をつけることによって、意味細分化や語彙拡充を実現した。これらの形声文字群においては、「青」は音符だけでなく、「すみきったさま」を表す語根でもあった。

中国で日本や韓国、ベトナムのように表音文字を作らなくてもすんだ理由は、形声文字の大量の増殖にあった。笹原宏之（2008）は形声文字が量産された理由について、「部首を付加する構造とすることで漢字の用途が細分化されるだけでなく、漢字に対して字音の表示を求める中国人の意識が形声の方法を好むことにつながったためであった<sup>10)</sup>」と述べている。表意文字（または表語文字）と言われている漢字は表意機能に優れていた反面、表音上の制約が大きかった。その制約を改善し、漢字の量産を可能にしたのは表意機能と表音機能を併せ持つ形声文字であった。

しかし、形声文字の表音機能が定着するにつれ、語根的な意味合いを表す表意機能が忘れられがちであるが、形声文字の表音符号は単なる音ではない。それぞれの音が保有していた、音声言語としての本来の意味合いを表音符号に留めていた。それゆえ、同じ音符を持つ形声文字群はしばしば共通する根源的な意味合いを有しており、いわば会意兼形声文字であることが多い。例えば、「胞、抱、泡、鞆、砲、飽」における「包」や前述の「粉、紛、雰、芬、頒」における「分」は、単なる音を表す符号ではない。「包」の「つつむ」と「分」の「わける」といった根源的な意味合いをそれぞれの漢字が共有している。

「生」の字体は篆書体から隷書体になると、今日の「生」とほぼ同じような形となっている。それを音符とし、「姓」「性」「牲」「星」などの漢字が作られていった。ただし、「生」は多義語であるため、次に示したように、それぞれの漢字における「生」の意味は若干異なっている。

- ・「姓」：うまれた血筋を表し、かつ女系祖先にちなむ名であるため、女へんを添えた。
- ・「性」：うまれつきの澄みきった心のこと。
- ・「牲」：いけにえ、家畜を清めて祭礼の供え物としたもの、生きたまま神前に供える牛。
- ・「星」：澄んで清らかに光るほし。

## 第3時：同訓異字

## 【学習内容】

- ① 同訓異字の概念や共通根源イメージを理解させる。
- ② 同訓異字による日本語の語彙拡充や意味細分化を理解させる。

③ 日本語の「同訓異字」と中国語の「形声文字」の役割の類似点に気付かせる。

#### 【学習活動】

- ① 「生」の訓読みを調べる。
- ② 「うむ」「いきる」に当てられた漢字を調べ、これらの漢字の表意上の共通点を考える。
- ③ 同訓異字の共通根源イメージを絵図化して、ことばで表現する。
- ④ 日本語の「同訓異字」と中国語の「形声文字」の役割の類似点について考える。

#### 【指導上の留意点】

- ・ 同訓異字の共通根源イメージを理解させるために、分かりやすい用例を用意しておく。
- ・ 漢和辞典や国語辞典の活用を促す。

#### 【評価】

- ・ 同訓異字の共通根源イメージや語彙拡充の過程について理解できたか。

#### 【考察】

図5の右側で示したように、「生」の訓読みは「いきる」「िकास」「うまれる」「うむ」「なま」などがあるが、ここでは「うむ」「いきる」に注目してみたい。

「うむ」に当てられる漢字には「生」「産」「膿」「熟」「績」等がある。異なる漢字が当てられたため、別のことばとして認識されがちである。しかし、それらの共通根源イメージを絵図化すると、図6のように、ある物体の中で何かが大きくなっていき、それがもとの物体から飛び出して新たな物体ができてくるような図を描くことができるであろう。

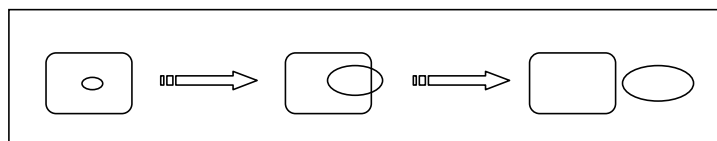


図6 「うむ」の共通根源イメージ図

「生む」については、「利潤を生む」「疑惑を生む」といったように生物以外のものにも広く使われるのに対し、「産む」は人間を含む生き物の出産に限定されがちであるが、「生」と「産」の絵図化されたイメージは共通している。「うむ」の音を持つ他の言葉を思い浮かべると、「膿む」についても、果実が次第に成熟する「熟む」についても、繭や綿から繊維をつむぐ「績む」についても、中にあったものが徐々に大きくなり、外に出てくるという共通したイメージが存在することに気づく。さらに「うむ」の連用形「うみ」にまで範囲を広げて同訓異字を探ると、「膿」ばかりでなく、出産の主体である「母」を内包する「海」にまで連想が及ぶ。このように、共通する根源的なイメージを絵図化することによって学習者の想像力を広げ、ことばの不思議な世界に誘うことも可能であろう。

「いきる」に当てられる漢字は「生」「活」である。中西進(2008)は、「いきる」の古語は「いく」で、このなかに「息」ということばが隠れている<sup>11)</sup>と述べている。つまり、「生きる」と「息」の読みは「いく」という根源的なイメージに由来している。また、「活」は「汜」がついており、元々は水が勢いよく流れることを表していたが、「水が動く」から「生物が動く」、さらに「いき

る」「くらす」「いきいきとしたさま」といった抽象的な意味を表すようになった。「生」と「活」はそれぞれ異なる意味を持ち合わせながら、その根源的なイメージが共通している。

鈴木孝夫(1987)は、大和言葉の特質について、「単音節は百十の音節しかないんだから、同音語が猛烈に増える」、「日本語の基本語彙が、基本的には非常に抽象性の高い意味構造を持っている<sup>12)</sup>」と指摘している。和語の同音語を識別するためにも、抽象的な意味を表す語彙を具体化するためにも、表意性をもつ漢字を和語に配する必要がある。

同音の和語に異なる漢字を当てはめて同訓異字を生み出したことは、同音語が多いことに伴う理解の困難さを解決する一手段であった。例えば、「会う」「合う」「逢う」「遇う」「遭う」は漢字の表意性によって、それぞれのことばの意味合いが一目瞭然である。

一方、漢字による意味の明確化と意味細分化が行われたため、例えば、「離す」「放す」「話す」のように異なることばとして捉えられていたものも少なくない。「離す」「放す」は「はなす」から転じた言葉で、「話す」とは語源が異なっていると理解されている。「離す」「放す」はものなどをくっついている状態から切り離す、または、ものがある事物から遠く離れていく動きを表しているのに対し、「話す」はことばで伝えて広める、口で述べる動作を表している。しかし、「話す」という、ことばが口から離れていく動作の特徴を絵図化すると、「離す」「放す」に類似した動きとなり、共通根源イメージが存在した可能性が浮かび上がる。『日本国語大辞典』(小学館2003)では、「はなす【話・咄】」の語源について、「ハナシは放シの義か〔玉勝間・俚語集覧・言元梯〕。心事をハナス(放)の義〔紫門和語類集・大言海〕。言語を口外に離スの義〔国語の語根とその分類=大島正健〕」と記されている。日本語の国字である「咄」も、「心事を口の外に出す」という意味合いに由来すると考えられる。

「はなす」という和語の持つ「ものがある事物の中またはその事物の周辺から遠ざかっていく」というイメージを絵図化すると、その根源的な意味合いがそれぞれの漢字の中に共通していることに気づくであろう。図7は「はなす」の根源的なイメージを表現している。その中に描かれたAとBを具体的な事物に変換し、変換した具体的な事物間の関連性を学習者に想像させる。このような「変換・要素関連づけ<sup>13)</sup>」活動(表1)を行うことで、「はなす」の同訓異字に含まれる共通根源イメージをより理解しやすくすることができる。

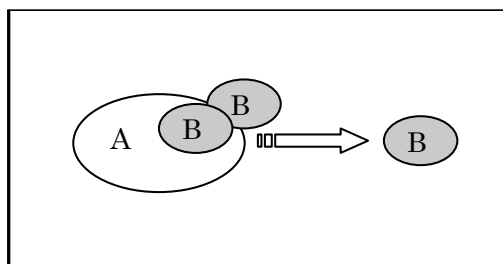


図7 「はなす」の共通根源イメージ<sup>14)</sup>

表1 「はなす」の「同訓異字」に関する変換表

同訓異字	A	B	要素関連づけ
話す	口	言葉	人が何かを話す
離す	焚き火	本	本を火から離して置く
	ハンドル	手	手をハンドルから離す
放す	鳥かご	鳥	かごの中の鳥を放す
	バケツ	釣った魚	釣った魚を川に放す

もう一つの例を見てみよう。「つく」の同訓異字は「付」「就」「着」「突」「点」「撞」「搗」などである。異なる漢字が当てられたことによって、「別語意識」が強いが、図8に示したように、「何かに向かって近づく」という「つく」の根源的な意味合いがそれぞれのことばの中に共通している。そして、図9のようにAを「食卓」や「床」に、Bを「客」「父」に変換すると、「客が食卓に就く」「父が床に就く」という要素関連づけができる。この方法で、「電車が駅に着く」「ワインが洋服に付く」「矛で盾を突く」「マッチで火が点く」「棒で鐘を撞く」「杵で餅を搗く」<sup>15)</sup> といったような短文を作ることができ、「つく」の共通根源イメージへの理解を深めることができる。

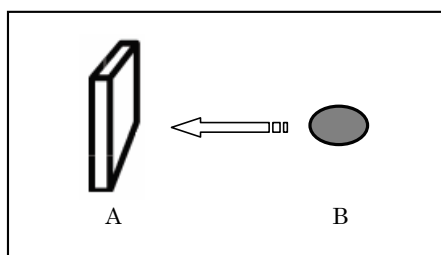


図8 「つく」の共通根源イメージ図

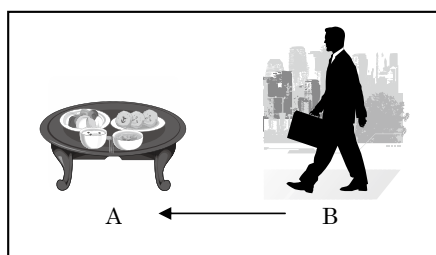


図9 「食卓に就く」

第2時と第3時では、「生」「青」「包」「分」を音符とした形声文字群と「うむ」「いきる」「はなす」「つく」の同訓異字を見てきた。日本語の「同訓異字」における和語の「根源的なイメージ」と中国語の「形声文字」における「語根（音符）」は、類似した働きを果たしていると言えよう。つまり、日本語の場合、抽象的な意味を表す大和言葉に複数の漢字を当てることによって意味を細分化し語彙拡充を実現していったのに対し、中国語（漢字）の場合、ある感性的な特色を持つ音を一文字で表し、それに偏や旁をつけることによって同じ語根の漢字を作り続けることができた。このような優れた造語力は漢字の大きな特質である。

上記の作業を通して、日中両言語の特質を認識させるだけでなく、大和言葉が漢字を柔軟に受け入れた理由や日本の伝統的な言語文化における漢字、漢字語彙の役割への理解を深めさせることもできよう。

#### 第4時：同義反復熟語

##### 【学習内容】

- ① 同義反復熟語の概念を説明し、その形成理由や形成過程を考えさせる。
- ② 漢和辞典を活用し、同義反復熟語を集めさせたり作らせたりすることで、語彙拡充を図る。

##### 【学習活動】

- ① 同義反復熟語の概念を理解し、新聞や雑誌などから同義反復熟語を集める。
- ② なぜ日中両言語に同義反復熟語が数多く存在しているかを考え、話し合う。
- ③ 調べ学習の中で、漢和辞典の字索索引を活用し、同義反復熟語を作り、国語辞典で確かめる。

##### 【指導上の留意点】

- ・中国の南北方言を分かりやすく説明するように心掛ける。
- ・意味が類似したり、一部だけ同義である漢字が多く存在しているので、辞書の活用を促す。

## 【評価】

- ・ 同義反復熟語の形成理由を理解し、漢字語彙の構成上の特徴に興味を持ったか。
- ・ 漢和辞典や国語辞典の調べ方を身につけたか。

## 【考察】

「生」の意味について、『大漢和辞典』では、「㊦うむ〔集韻〕生、産也。」「㊧いきる。㊨存活する。生きてゐる」(傍点引用者)と記されている。「うむ」に当てられた漢字は「生」「産」で、「いきる」に当てられた漢字は「生」「活」である。これらの同訓異字を組み合わせると、同義反復熟語「生産」「生活」になる。

なぜ類似した意味を持つ異なる漢字を組み合わせ、一つの熟語として使われているのか。その必要性と存在理由を推測することで、中国の民族移動や民族同化の過程に伴って生じた中国語(漢語)の変容の一端を見ることができる。

広大な中国で漢民族と多くの少数民族が共存し、各民族によって話し言葉や方言が多様であるにもかかわらず、政治的な一体性や文化的な共通性を印象付けることができたのは、漢字によって表記された書き言葉があったからにはほかならない。漢字によって表記された書き言葉は、古代以来北方民族の不断の侵略によって絶えず「北方語化」がなされていった。「北方語化」の浸透によってもたらされた漢民族の言語の変化について、橋本(1987)は次のように述べている。

何度目かの北方民族の侵入の結果、漢民族の言語の主流となった北方のことばでは、(中略)中世以来、

“め”	目→眼	“くち”	口→嘴
“のむ”	飲→喝	“くう”	食→吃
“いぬ”	犬→狗	“さる”	猿→猴
“いく”	行→去	“はしる”	走→跑

のように、人体の部分、生存のための動作、身近な動物、基本動作といった、一言語のもっとも基礎的な語彙に、大幅な変化がおこってしまった。(中略)目、犬のような単語と、それを表す文字は、日常話すことばとしては消え去っても、文語には依然と存在しているうえに、南方の方言には、今でも口で話す、生きたことばとして残って、使われている<sup>16)</sup>。

南方の「目」から北方の「眼」へと変化していったという上記の橋本の指摘に注目したい。現在中国の広い範囲で使われているのは「眼」であるのに対し、日本では主に「目」が用いられている。また、「眼目」という同義反復熟語は当初は「め」を表していたが、「物事の肝心なところ」といった抽象的な意味を表すようになっていく。このような現象が存在する理由を探るには、他の多くの用例に当たる必要がある。

中国における「生」と「活」の分布を見てみよう。『漢語方言詞匯』(1964)では、「いきる」に該当する方言を見ると、中国の大部分の地域では「活」が使われているのに対し、南方の梅県、広州、陽江では「生」に通じる発音となっており(図10と表2<sup>17)</sup>を参照)、「生活」という同義反復熟語は、地方による異なった二種類の音を組み合わせ、誕生した可能性を覗かせる。日本語



図10 中国における「生」「活」の使用分布図

表2 中国各地における「いきる」の言い方

地域	「いきる」の言い方
北京	活
濟南	活
西安	活
太原	活
武漢	活
成都	活
合肥	活
揚州	活
蘇州	活
温州	①活 ②健
長沙	活
双峰	活
南昌	活
梅県	生
広州	生
陽江	生
厦門	活
潮州	活
福州	活
建瓯	生

では、「いきる」という意味を表す時に主に「生」が使われていることから、中国の南方方言に見られる「生」が、「活」が広まる以前に中国を広く覆っていたことを推定できる<sup>18)</sup>。一方、「生産」の場合は、「産」という漢字の中に「生」という文字が含まれており、「うむ」という意味を同じく持ちながら「生」とはかけ離れた音で表された言い方に対して、新たな漢字を作った可能性を想像することができる。

「同義反復熟語」は、誕生時には両方の文字が持つ共通した意味で用いられていたと思われるが、時代を経る過程で、使用される対象や場面が限定されたり、関連する抽象的な意味を持つ語彙へ転用されたりする傾向も見られる。「生活」は日本語でも中国語でも、「生」と「活」の本来の意味である「いきる」よりも、「暮らし」や「生計」という意味の名詞として使われている。また、「生産」も近年ではもっぱら物質が生み出される場合に限定して用いられるようになっており、生き物が子供を生む「生産（しょうさん）」はほとんど死語となっている。

同様の用例は「は」に対する北方の「牙」と南方の「齒」、さらにそれらを組み合わせた同義反復熟語「齒牙」にも当てはまる。中国における「牙」と「齒」の分布図（図11と表3）を参照されたい。

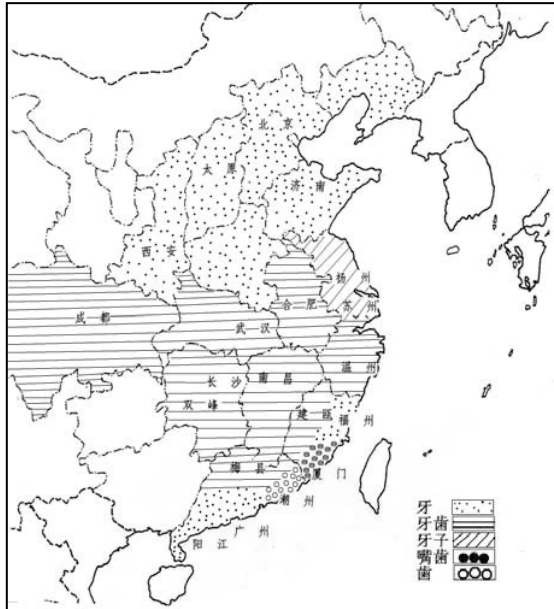


図11 中国における「牙」「齒」の使用分布図

表3 中国各地における「は」の言い方

地域	「は」の言い方
北京	牙
濟南	牙
西安	牙
太原	牙
武漢	①齒 ②才調子
成都	牙齒
合肥	牙〔齒〕
揚州	牙子
蘇州	牙子
温州	①牙齒 ②牙
長沙	牙齒
双峰	牙齒
南昌	牙齒
梅県	牙齒
広州	牙
陽江	牙
厦門	嘴齒
潮州	齒
福州	牙
建瓯	牙齒

中国における「は」の分布図に基づき、次のように推測することができる。

中国では、かつて南方の広い範囲で「齒」が使われていた。北方民族の勢力の拡大によって、「牙」の使用が広がり、北方的な「牙」と南方的な「齒」が衝突し、やがて、「牙」が「齒」を代替したり、盛んに交流が行われていた中間地域で「牙齒」という複合語を生み出したりして、地域間や民族間の意味伝達や交流が図られていた。今日、北方では元々の「牙」を、南方では元々の「齒」を保留しているが、複合された「牙齒」（日本語では「歯牙」）は「は」の意味から離れた抽象的な意味合いをも持つようになってきている。例えば、中国語の「伶牙俐齒（弁舌さわやかなさま、口上手である）」、日本語の「歯牙にもかけない」<sup>19)</sup>。

以上のいくつかの用例を通して、同義反復熟語の形成理由については次のような仮説を立てることができる。

1. 言語の地域間の差異（あるいは集団間の差異）による意思疎通上の不便さを解消するために、おそらく当初は書き言葉において両語併記方式が使われた。
2. 同じ具体的な意味を持つ語が重複して存在したため、日常の話言葉で使用される頻度の少ない同義反復熟語が関連する抽象的な意味を持つ語彙へ転用された<sup>20)</sup>。

上記のほかに、「樹木」「河川」「温暖」「会合」「下降」のような同義反復熟語が多数存在している。このような特色を有する同義反復熟語の存在の背景には、中国語の成立に異なった地域の言語や異なった民族集団の言語の関与といった複雑な経緯が絡んでいたり、語彙や表現の拡充に応じて、本来一文字（単音節）を基本単位としていた中国語に複音節化を求める傾向を推定する



ことができるが、その実像が解明されているわけではない。しかし、他の言語には見られない同義反復熟語が日本語や中国語に多数みられるという不思議さを学習者に提示することで、漢字語彙の成り立ちの奥深さを認識させることが期待できる。また、漢和辞典の字訓索引を活用させ、同義反復熟語を作らせたりすることで、語彙力、思考力の育成にも繋がるであろう。

同義反復熟語を指導した後に、「生」「産」「活」からなるほかの熟語に触れることもできる。「生」「産」「活」は、類似した意味を持ち合わせていながらほかにも多くの意味がある、いわゆる多義語であるため、もう一つの漢字を付け加えることによって意味を限定する必要があった。例えば、「生物」「産物」、「出生」「出産」、「生氣」「活気」、「生動」「活動」はその用例である。それぞれの熟語における「生」「産」「活」の意味を次の表4に示す。

表4 「生」「産」「活」からなる熟語

熟語	熟語の意味	「生」の意味	「産」の意味	「活」の意味
生物	いきもの	いきる		
産物	その土地に産する物		産出する、うむ	
出生	赤ちゃんがうまれる	うまれる		
出産	赤ちゃんをうむ		うむ	
生氣	いきいきとした気力	いきいきとする		
活気	活動のもとになる精気			勢いよく動く
生動	いきいきとして動き出し そうに見える	いきいきとする		
活動	働き動く、いきいきと行動する			いきいきとする

このように、「生」「産」「活」は類似した意味を有しているが、それぞれに別の同じ漢字を付け加えると、異なる意味を持つ熟語となる。これも漢字語彙拡充の一つの手段である。

#### 第5時：総括

##### 【学習内容】

- ① 漢字樹の手法を応用し、「分」の漢字樹を作らせる。
- ② 本単元の内容を総括する。
- ③ 学習後の感想を書かせる。

##### 【学習活動】

- ① 「生」の漢字樹の応用として、グループ作業で用意された「分」の漢字樹の空白部分を補い、班ごとに発表する。
- ② 本単元の学習を通して考えたこと、感じたことをまとめる。

##### 【指導上の留意点】

- ・漢字樹の発表時に、ほかのグループには良かった点をメモさせる。

##### 【評価】

- ・日中の漢字文化や漢字、漢字語彙の特質を理解し、ことばを考える姿勢ができたか。
- ・学習後の感想をグループのほかのメンバーと分かち合い、自己評価ができたか。

## おわりに

本稿では、まず、2009年告示の高等学校学習指導要領に新設された「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容と日中の漢字文化との関連性を分析し、両者の捉え方について論じた。次に、日中の漢字、漢字語彙の特質や繋がりを「漢字樹」として表現し、それを用いた新たな漢字、漢字語彙指導法を提案した。この提案では、「生」の成り立ち、字音、字訓、同訓異字、同義反復熟語などの多様な側面を取り上げて、ネットワークのように広がる漢字の世界を「漢字樹」という姿で提示した。「漢字樹」を作らせることを通して、和語と漢字の繋がりをそれぞれの特質および漢字の造語力、漢字語彙の形成過程に対する理解を深めさせることを試みた。

また、このような作業を通して、一つの漢字を見たときに、そこから次々と関連した漢字群を連想し、その漢字群からできた熟語の意味を考え、和語と漢字の繋がりを表現上の相異を常に意識するような習慣づけができれば、漢字や漢字語彙への関心は大いに深まるであろう。さらに、樹木が一つの幹から大きな枝をいくつも伸ばしていく姿を示して順に説明し、作業を通して確認させることで、その樹形の背後にある日中漢字文化の不思議な世界に導き、自ら進んで漢字を学習していくきっかけを与えることができるであろう。

今後の課題としては、本指導法の手法で、様々な「漢字樹」を作成して、系統的な漢字、漢字語彙指導の基盤を作り上げ、実践を通してその有効性と問題点を検討していきたい。

## 【注】

- 1) 本稿は、2010年8月19日に開催された平成22年度第42回解釈学会全国大会・三重大会における口頭研究発表に、当日の研究協議の内容を踏まえて加筆したものである。
- 2) 斯波義信(1983)「社会と経済の環境」『民族の世界史5 漢民族と中国語』橋本萬太郎編 山川出版 196頁
- 3) 橋本萬太郎・鈴木孝夫(1983)「漢字文化圏の形成」『民族の世界史5 漢民族と中国語』橋本萬太郎編 山川出版 9頁
- 4) 注3に同じ。31頁
- 5) 注3に同じ。31頁
- 6) 向山洋一(2006)『教え方のプロ・向山洋一全集 77 向山型国語=暗唱・漢字文化・五色百人一首』明治図書 50頁
- 7) 同訓異字とは、同じ訓読み当てられた複数の漢字である。例えば、「おさめる」の同訓異字は「納」「治」「収」「修」である。
- 8) 同義反復熟語とは、同じまたは類似した意味を持つ二つの異なる漢字の組み合わせによってできた熟語である。例えば、「樹木」「河川」「温暖」「上昇」。
- 9) 本稿における漢字字義の解釈は『漢字源』(藤堂明保・松本昭・竹田晃編 学習研究社 1993)による。
- 10) 笹原宏之(2008)『訓読みのはなし 漢字文化圏の中の日本語』光文社 31～32頁
- 11) 中西進(2008)『ひらがなでよめばわかる日本語』新潮社 84頁
- 12) 鈴木孝夫(1987)「日本語と漢字—十時間徹底鼎談」『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編 大修館書店 11頁
- 13) 「変換・要素関連づけ」という概念は、鹿内信善が著した『やる気をひきだす看図作文の授業—創

造的[読み書き]の理論と実践―(春風社 2003)を参考にした。「変換」とは、図形記号を言語記号に変える処理を行うことで、「要素関連づけ」とは図形中の諸要素を関連づける活動のことである。

- 14) 図7と表1は拙稿「イメージ模型図を用いた発見型漢字指導法―『同訓異字』に着目した授業開発」(『月刊国語教育』2009年12月号 第29巻第10号 東京法令出版)による。
- 15) 「撞」と「搗」は常用漢字表外字であるので、指導する際に、手で行う動作を表す漢字に「手へん」がつくという程度の説明にとどめたほうがよい。
- 16) 橋本萬太郎(1987)「ことばと民族」『漢字民族の決断―漢字の未来に向けて』橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編 大修館書店 132～133頁
- 17) 図10と表2は『漢語方言詞匯』(文字改革出版社 1964)の内容に基づいて筆者が作成したものである。中国語の表記は便宜上日本語の漢字を用いる。図11と表3も同様である。
- 18) 「生」だけでなく、日本語として定着した「目」「齒」「飲」「食」「犬」なども中国の南方方言に共通する。
- 19) 「牙」と「齒」に関する仮説や図11と表3は拙稿「二文字漢字熟語の構成分析から語彙力の向上へ―国語科教育における新たな漢字語彙指導法の模索―」(『早稲田大学国語教育研究』2009年 第29集 早稲田大学国語教育学会)による。
- 20) この仮説に関する説明は、拙稿「豊かな語彙力を目指す授業創り一日中の『同義反復熟語』をめぐって―」(『解釈』2008年5・6月号 第54巻 解釈学会)、上記拙稿「二文字漢字熟語の構成分析から語彙力の向上へ―国語科教育における新たな漢字語彙指導法の模索―」を参照されたい。

## 【参考文献】

- ・橋本萬太郎編(1983)『民族の世界史5 漢民族と中国社会』山川出版
- ・橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編(1987)『漢字民族の決断―漢字の未来に向けて』大修館書店
- ・藤堂明保(1982)『漢字文化の世界』角川書店
- ・藤堂明保(1986)『漢字の話 上』朝日新聞社
- ・鹿内信善(2003)『やる気をひきだす看図作文の授業―創造的[読み書き]の理論と実践―』春風社
- ・向山洋一(2006)『教え方のプロ・向山洋一全集 77 向山型国語=暗唱・漢字文化・五色百人一首』明治図書
- ・中西進(2008)『ひらがなでよめばわかる日本語』新潮社
- ・笹原宏之(2008)『訓読みのはなし 漢字文化圏の中の日本語』光文社
- ・高田時雄(2009)『漢字文化三千年』臨川書店
- ・李軍(2008)「豊かな語彙力を目指す授業創り一日中の『同義反復熟語』をめぐって―」『解釈』5・6月号 第54巻 解釈学会
- ・李軍(2009a)「二文字漢字熟語の構成分析から語彙力の向上へ―国語科教育における新たな漢字語彙指導法の模索―」『早稲田大学国語教育研究』第29集 早稲田大学国語教育学会
- ・李軍(2009b)「イメージ模型図を用いた発見型漢字指導法―『同訓異字』に着目した授業開発」『月刊国語教育』12月号 第29巻第10号 東京法令出版

